

## 砕氷艦「しらせ」体験航海に参加した医大生からの手紙



体験航海に参加し、後日厚木募集案内所を訪れた朝原さん

神奈川地方協力本部厚木募集案内所（所長 岡山1海尉）に、昨年10月に横須賀地方総監部で実施された砕氷艦「しらせ」体験航海に参加した東海大学医学部4回生朝原 総一郎（あさはら そういちろう）さんから感想の手紙が届いたので紹介する。

2017年10月11日早朝、秋の終わりを感じさせるような冷たい雨の中、私は横須賀の突堤で8年ぶりに「しらせ」と再会しました。初めて「しらせ」を見たのは、中学生の時でした。その頃の私は、医師になるのも思っておらず日々をただ、だらだらと過ごしていました。そんなある日、友人に誘われて神戸港に寄港した「しらせ」を見に行きました。その時、強烈な印象を受けたのを今でも覚えてます。

大学4年生になり将来のことを考え始めた時、不意に中学生の時の記憶がよみがえり、再び「しらせ」を見たいと思いました。自衛官募集案内所に連絡すると、偶然にも体験航海の予定があることが分かり、早速申し込みました。並行して、医師として乗艦するにはどうすればいいのかを調べてもらいつつ、自分でも「しらせ」や南極のことについて調べました。

当日、私は乗艦してまっすぐ医務室に向かいました。看護官の方から様々なお話を聞き「しらせ」での仕事がどのようなかを教えて頂きました。その後、艦内の隅々まで歩き回り、艦橋や飛行甲板、船室を見学し、その先々で、搭載ヘリコプターのパイロットの方や航海士の方に専門的なことから豆知識まで色々なことを教えて頂きました。目につくものを片っ端から質問する子供のような振る舞いの私に、どの方も快く応じてくださり、横須賀を出港して大井ふ頭につくまでの3時間は、まさにあっという間でした。

私は自分が理想とする医師とは、どういふものなのかと決めあぐねています。体験航海を経て、将来の選択肢の1つに自衛隊の医師が加わりました。この事を案内して下さった厚木募集案内所の広報官の方にお伝えしたいと思います。

## 地本用語の「つなぎ」とは・・・



陸自第1空挺団通信中隊山口 雄大1士（左）と懇談する入隊予定者（右）

新入隊員の募集を行う地方協力本部では、受験・入隊の意志を維持し、向上させるための広報活動を「つなぎ広報」と言う。広報官が受験予定者や入隊予定者に部隊見学や体験搭乗を案内することが代表的なものだが、対象者の目線より効果的な方法はないか日々試行錯誤している。

神奈川地方協力本部厚木募集案内所（所長 岡山1海尉）は12月22日（金）、昨年春に当募集案内所を通じて入隊し、現在は陸自第1空挺団通信中隊指揮所通信小隊（習志野）に勤務する山口 雄大（やまぐち ゆうだい）1士を迎え、自衛官候補生採用試験に合格し、入隊を控える厚木市在住の高校生和賀 晴輝（わがはるき）君との懇談を実施した。

山口1士は、空挺団の魅力や仕事のやりがい、教育隊での生活や部隊勤務でのアドバイスなどを伝えていた。話をきいた和賀君は「空挺団に興味を持ちました。山口さんが熱意をもって仕事をしているのが分かり、私もそのように働きたいと思いました。また、駐屯地にはクラブ活動もあるようなので入隊しても大好きなサッカーを続けられます」と話し、入隊に向けてより意欲が増した様子だった。初対面の二人が楽しそうに懇談する様子をみた広報官は「私と話す時とは違い、緊張せず説明に聞き入り、積極的に質問していた。入隊予定者と年齢が近く、なにより現場の声を伝えられる隊員が対象者の心をつかむのかもしれない。今後のつなぎ広報の参考にしたい」と話した。

山口1士は「和賀君が不安にならないよう、丁寧に話す事を心掛けました」と話していた。

厚木募集案内所は「より効果的な「つなぎ広報」を追求し、入隊予定者に自衛隊に対する理解を深めてもらい、不安を払拭して入隊できるよう努力していく」と話している。